

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

七尾市は旧国の能登、現在の石川県に属し、本州中央部の日本海側に突き出た能登半島の付け根に位置する。能登の地形は峻険な低山が海岸部まで迫り、大きな河川はなく、小河川が形成する小規模な扇状地が分布している。半島南西部の外浦（羽咋市）から北東部の七尾南湾（七尾市）にかけて、西は眉丈山系、東は石動山系に挟まれた能登随一の穀倉地帯である邑知地溝帯が存在し、地溝帯の北端部の沖積地には能登国分寺跡や栄町遺跡、東丘陵部には古府タブノキダ遺跡や千野廃寺、七尾城下町が所在し、丘陵北端には矢田遺跡や万行遺跡が存在する。

平成16年10月1日に七尾市と鹿島郡の中島町・田鶴浜町・能登島町の1市3町が合併し、新生七尾市として新たな一步を踏み出したばかりである。隣接する市町村は、海を挟んで能登島の北側に穴水町、西側に志賀町、南側に中能登町及び富山県氷見市が接する。面積は317,92km²を測り、平成17年10月1日時点では人口62,839人を数える。平成7年の国勢調査では67,368人、平成22年の国勢調査では57,900人を数え、平成27年の国勢調査（速報値）では、55,348人と近年の過疎化及び少子高齢化による人口減少が問題となっている。

七尾市の平均気温は13.5℃、平均降水量は2,064.4mmを測る。日本の平均降水量が約1,700mmであるため、やはり北陸地方特有の雨の多い地域と言える。平均積雪量は31cmで加賀地方や越中（富山県）・越後（新潟県）と比較すると積雪量は多くない。

開湯1,200年を迎えた“和倉温泉”や七尾市街地では「青柏祭の曳山行事（通称でか山）」、中島地区の「熊甲二十日祭の杵旗行事」、「能登島向田の火祭」などの国指定重要無形民俗文化財の祭礼が季節を通して能登の風土・生活に密着した種々の伝統ある祭りが息づいている。¹⁾

□七尾のみなと

能登島と崎山半島が自然の防波堤となり、天然の良港である七尾湾は海が荒れた時は避難港として現在も役割を担っている。七尾市内には能登島、七尾西湾・南湾部、富山湾沿岸部（灘浦）を含めて現在24の港が存在し、大半が漁港であり、一部地方港湾を含み、七尾港は特定重要港湾として国内や外国からの船舶が平成16年度で1,374隻入港している。輸入される貨物の99%は石炭・LPG・木材で占められ、石炭はオーストラリア、LPGはクウェート、木材はロシアが上位を占める。石炭は、七尾港の東に位置する北陸電力七尾大田火力発電所へ、LPガスは七尾南湾の入口にあるLPガス国家備蓄基地に運搬される。¹⁾

近年、エネルギー港湾としての役割が強まっている七尾港であるが、その歴史を文献史料から辿ると古代まで遡ることができる。斉明6年(660)に越の国守阿部比羅夫率いる船団が肅慎(みしはせ)と戦い、能登国造能登臣馬身竜が戦死したことを「日本書紀」は伝えているが、当時七尾南湾は鹿嶋津と呼ばれ、七尾港は大和朝廷が東北へ進出するための兵站地及び発信基地として機能していた推測されている。

軍港としての機能は幕末にも存在し、文久2年(1862)三月に幕府により「七尾軍艦所」が創建された。²⁾所在地は、矢田・万行村境の海岸沿いに広さは約65,000m²で蒸気製造所とも呼ばれ、棧橋・造船所・製鉄所・機械室・倉庫・工員住宅などがあった。慶応3年(1867)には欧米の外国船が初めて入港している。幕末から明治初頭にかけて藩は艦船を計七隻購入・所有し、これらには白地に紺の劍梅鉢(前田家の家紋)の船印を付したので、「梅鉢海軍」と称された。明治2年(1869)2月には、金

沢藩（版籍奉還に際し加賀藩を金沢藩と改めた）が軍艦所に洋学所を設けており、明治37年(1904)年には七尾線から鉄道を分岐し臨港線を敷設し、七尾港駅を開設した。近世では、日本海海運もいよいよ盛んになり、北前船も活躍するが、幕末には加能両国の中で所口湊は宮腰に次ぐ船数、入船回数を誇る。中世に能登島山氏の外港（所口湊）として軍事・貿易面で栄え、古代には能登国の国津である鹿嶋津として機能している。天平20年（748）春に大伴家持が能登巡行をした際に詠んだ歌には、当時の七尾周辺の状況を示す歌もあり、「鳥総立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ」³⁾ から造船などに用いられる木材資源や造船技術が存在したことが読み取れ、5世紀には矢田丸山古墳や矢田高木森古墳などの被葬者が七尾南湾（鹿嶋津）を背景に政治的拠点化を完成していることから、七尾南湾地域の港湾的役割が万行遺跡の発見により、さらに遡る可能性高まった。佐味今田谷内古墳群は、万行遺跡から東に1キロ離れた丘陵部に所在する古墳群で地理的には矢田高木森古墳と三室まどがけ古墳の中間に位置する。

- 1) 『七尾港港湾統計年報 平成16年度』 石川県七尾港湾事務所
- 2) 1974 七尾市役所『七尾市史』「第四編 第6章 幕末の世相と明治維新」
- 3) 2003七尾市役所『新修 七尾市史』「第1章 飛鳥・奈良時代 第二節 能登の立国」
『万葉集』卷十七ー四〇二七

1999『図説 七尾の歴史と文化』「原始・古代 大伴家持と能登の海」
歌意「鳥総を立てて船材を伐るという能登の島山よ。今日見ると木立が繁っていて幾多の年月を経て何と神々しいことか。」とある。この歌謡は、能登半島にはヤマト政権の時代から舟木部が置かれ、造船が重要な生業の一つであったことを知った上で、家持が香島津から船に乗り、七尾南湾や西湾に浮かぶ島々から伐りだされる様子を確認したと推測されている。



写真2 佐味今田谷内2号墳から七尾港大田第二埠頭に停泊する豪華客船「飛鳥Ⅱ」を望む